

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	中山 孝男
最終学歴	学 位	専門分野
一橋大学大学院経済学研究科博士課程 単位修得満期退学	経済学修士	経済学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

第1に、時間割の関係から大人数の履修者が予想される「経済学」の講義を、学生が興味・関心をもって受ける授業にすること。

第2に、昨年度から担当することになった「学びの基礎Ⅰ」および「学びの基礎Ⅱ」（こちらの科目は時間割の関係から受講者はかなり少なくなると予想される）の教育内容を学生にきちんと伝えること。各回の授業の目的を明確にし、教えすぎないことに留意する。

その他の科目をも含めて、学生の理解度を確認しながら授業を進める。

(計画)

「経済学」では、テキストの内容に即した予習プリントを、前の回の授業時に配布し、十分な予習をさせ、各回の授業の前半ではそれについて説明する。そして、授業の後半では実際に生起している毎週の経済ニュースを解説し、世の中の動きとその意味を理解させる。

「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」では、1年生の基礎学力向上に資するべく、基礎の基礎から丁寧に授業を進め、「わかる」ということの楽しさを感じさせたい。

なお、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」では、卒業論文の指導を早い時期から行い、各学生が自らテーマを設定し、調査・研究、執筆までを余裕をもってできるようにさせたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）経済学、学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）国際関係論、学びの基礎Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

・「経済学」、「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」では学生個々ができるだけ考えるようにするため、上記計画で、は毎回予習プリントを配布することにしていたが、開講直前に計画を変更し、下のような問題集を手作りし、毎週、最低限それを解いてくる、ないし事前に解答を提出する方法を採った。

・専門演習では、学生個々の興味・関心のある卒論テーマを選ばせ、全員に12,000字以上の卒業論文を提出させた。

○作成した教科書・教材

- ・「現代経済入門教室〈確認問題集〉」
- ・「学びの基礎Ⅰ 2019年度版」（高木氏と共編）
- ・「学びの基礎Ⅱ 2019年度版」

○自己評価

・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」は、開講2年目に入り受講学生のいわゆる弱点が見えてきたので、そこに焦点を当て、集中的に何度も説明するという工夫をした。しかし、受講生の何人かは説明したそれ以前（以下）のレベルで躓いていたようで、最終的に学習効果があったかどうかはやや不明である

と言わざるをえない。言うまでもなく、次年度に向けての改善点となる。

II 研究活動

○研究課題

- ①D. リカードウ=T. R. マルサス論争史研究
- ②ウィリアム・エリスの機械論研究

○目標・計画

(目標)

昨年度殆ど進捗を見なかった①について引き続き研究する。特に両者の労働需要論を詳細に比較することにより、両者の学説の真の相違点が解明されると考えているので、それを中心に行いたい。

また、いつまでも①だけに関わっているわけにもいかないので、機械論研究を広げる意味で、年度後半には②を取り上げたい。そしてこれを機に古典派経済学のややマイナーな学説史研究に入っていく。

(計画)

①に関しては、ひたすら『リカードウ全集』第2巻「マルサス評注」を精読し新たな論点を発見する。

②に関しては、エリスの主著および(代表的な先学である)真実一男氏の著作を参考にし、リカードウ・マルクス等との関連を見出す。

言うまでもなく①②とも、論文として発表する。

○2012年4月から2020年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書) なし

(学術論文)

- ・中山孝男「リカードウ『機械論』章に関する一考察」『東邦学誌』第42巻第1号、2013年6月

(学会発表) なし

(特許) なし

(その他)

- ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012年度共同研究:(研究課題)「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動報告」、『東邦学誌』第43巻第2号、2014年12月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・なし

○所属学会

経済理論学会、経済学史学会、マルサス学会、政治経済学・経済史学会

○自己評価

・今年度は、近年あまり取り扱わなかったW. エリスの機械論を研究テーマの一つとした。その目標としては、学会の先達である真実一男氏の論考「ウィリアム・エリスの機械論」を越えることに置いたが、そもそもエリス自身がマイナーな経済学者であり、二次文献もほとんど存在しないという状況から上記真実論文を乗り越える論点を発見するには至らなかった。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学内理事として学園全般の運営に責任をもってあたる。とくに、労務担当、自己点検・評価、衛生委員会、情報マネジメント会議、等の分野では重責を担うので、視野を広く持ち、慎重な判断をしていく。

また、教育力向上委員会委員長として全学的な授業改善、そのためのFD開催、などを計画的に進める。

その他、高大連携会議を通じて、東邦高校との（とくに内部進学で）連携を図る。

(計画)

授業担当コマ数が削減されているとはいえ、多くの会議に出席しなければならない。諸会議の日程を考慮し、諸業務を計画的に遂行していく。

○学内委員等

常任理事会構成員、教学法人協議会構成員、衛生委員会委員、自己点検・評価委員会委員、経営政策会議構成員、高大連携会議構成員、情報マネジメント会議議長、運営委員会委員、学長会議構成員、人事委員会委員、教育力向上委員会委員長

○自己評価

・教育力向上委員長としてSA制度を成立させた。また、各学期末に実施している授業評価アンケート（のとくに自由記述欄）をもとに、開講されている授業に対する学生の不満・意見を聞き取りできるだけそれを解消する手段を講じることに努力した。

この2点に於いて今年度は結果を残せたのではないかと考える。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学での教育・研究活動の成果を、できるかぎり地域社会に還元する。

(計画)

高大連携授業や、高校からの出張講義要請にできるかぎり応じ、社会貢献をする。また、所属する経済理論学会の東海部会会場大学として学会活動にも積極的に協力する。

○学会活動等

・上記の通り、経済理論学会東海部会の開場大学として貢献する。

○地域連携・社会貢献等

・とくになし。

○自己評価

・今年度は、高大連携授業も出張講義もいずれもなかった。経済理論学会東海部会の開場大学としてのささやかな貢献はした。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

・専門分野の研究だけでなく、より広く社会科学全般（一部自然科学や人文科学を含めて）におけるさまざまな知識・学問成果を吸収したうえで、学生との対話などを通して、学生に学ぶことの楽しさを伝えられるように日々努力していく。

VI 総括

・教育と学内委員会の面では求められる以上の仕事をしたと言えるが、研究面ではほとんどゼロの

結果しか残せなかった。次年度以降、計画的に各方面での仕事をこなしていきたい。

以 上